

△放課後実験室2 サンプル▽

「お願いです。我慢できないんです。やらせてくれませんか。」

何を言い出すんだと理恵は急に出た言葉に対処できないでいた。

「あたしとする？マジで冗談はやめてほしいわね。」

「前の薬をください！早く！」

「もう・・・たまらなくなっちゃたのね・・・。」

理恵は仕方なく準備室に行くと前の実験薬を取り出しコップに注いだ。

勝也は一気飲みすると再び理恵にお願いをした。

「お願いです！！！」

「ちよっと冷静になろうよ。あたししたら律子ちゃんはどう感じると思う？」

「う・・・。」

「でしょ？」

「でも・・・部長の体操服姿がたまらないんです。」

理恵の体操服姿は特に胸が強調され短パンからこぼれ出す太ももとても眩しい。

「ふふ・・・変態さん。」

「も、もつと言ってください！変態って。」

「あら、本当に変態さんになっちゃったのね。」

理恵は困っていた。もう少し時間を稼がないといけない。なぜなら・・・。

バタッ

勝也は倒れ込んだ。

「危ないところだったわ・・・。」

・・・

「勝也君・・・勝也君・・・。」

どうやら睡眠薬が効いてきたようだった。

「ようやくお目覚め？」

「え・・・？」

「初日以来ね。まったく何を言い出すかと思えば。」

理恵は帰ろうかどうか迷っていたが、変態で反応する勝也が面白くて再びからかってやろうと思いついた。

「うっ・・・？」

勝也は目を覚ました。布団で寝ていたようである。

「あ・・・おれ・・・理恵部長としちゃったのか？」

「そんなわけではないでしょう！」

理恵は布団の横から見下ろしている。

「うわわっ！」

布団から起き上がろうと腕を伸ばそうとした瞬間だった。

ギッ！

「うっ！痛っ！」

勝也は腕を後ろ手にロープで組まれていた。以前もこんな事があったと思い出していた。

「また縛られているのか。」

「そうよ、あんたがやりたいなんて言い出さなければこんな乱暴なことはしないで済んだのにね。」

「俺を・・・どうしよう？」

勝也はそう言いつつも淡い期待を捨てきれずにいた。

「期待させてゴメンね。でもその欲望だけは解放させなきゃ私が危ないから。」

「解放・・・何を？」

「わかっているくせに。」

理恵は勝也の横に寝て手を勝也の短パンにかける。

「ああっ！」

「こうして欲しいんですよ。」

勝也の短パンをブリーフごと少し下げるとその巨根が姿を現す。

「あらあ・・・今日も凄いのね。」

「ま・・・前に部長にやってもらった時以来ですよきつと。」

「上手いこと言つのね変態君。」

「ああっ!!！」

変態と罵られ、男根に刺激をつけて至福の時間を堪能する勝也だったが理恵は素直に喜べない。

(なんだこいつ・・・本当の変態かよ。)

理恵は再び扱き出す。

「ああっ！もつと！」

「こんな軽い刺激でイってしまいそうなんて変態でも大したことないわねえ。」

「もつと、もつと罵倒してください。」

理恵はエスカレートする要求に答えられる自身が無くなってきていた。

「いいの？もう出しちゃうの？一回でいいの？」

「さ・・・三回は出させてください。」

「正直ねえ・・・三回持つかしらね。」

「大丈夫です・・・俺・・・ああっ！！！」

理恵は男根の根本から亀頭に刺激を加えた。

「ああっ！もう出ます！」

勝也は一回目の放出を始めた。

どぴゅ！どぴゅ！どぴゅ！

その大量の放出で理恵の体操服が精液でベトベトになってしまった。

「きゃあ、何するのよー！」

「だって俺動けないから・・・。」

理恵は少し怒りながら体操服を脱いだ。理恵のブラに包まれた豊満なおっぱいが目の前に現われる。そして勝也の男根に更に血液が流れ込みその堅さを確実なものにしていく。

「ひゃあ・・・二回目がこんななんて初めてじゃない？」

「理恵部長がは・・・裸同然だからですよ。」

ブラに短パン姿。これほどアンバランスで欲情をそそる姿があっただろうか。欲を言えばブルマの方が好

きだと思っただが未だに現物を見たことがない。

「部長・・・ブルマ持っていないですか？」

「いやあー！変態！」

理恵もこの勝也の変態ぶりに参ってきていた。

（なにがブルマよ・・・。）

「そっちがそんな変態なこと言うから。」

理恵は足と足でモノを挟み込み擦り合わせ始めた。すなわち足「キ」である。

「あ・・・ああー！」



「どうよ、足でされるのは？この変態！」

「凄く良いです！」

もう勝也に何を言ってもダメそうだった。

こんな勝也を苦しめる方法はもう無いのか・・・？そう思ったときである。